

## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 164号 2010.10.4 発行 社会政策研究所

9月22日から4回、大阪日日新聞に掲載された特集記事「違いを力に -発達障害をめぐる現場から」の第1部「本人と家族の挑戦」を紹介します。本日から第2部がスタートしていますが、これはまた、まとまったところで紹介します。【kobi】

### 違いを力に -発達障害をめぐる現場から

歴史に名を残す偉人と落ちこぼれ扱いされる人たち -。世間の評価は対極だが、そのどちらにも深くかかわるのが発達障害者だ。周りの環境によって発揮する力は大きく左右され、その環境づくりは、近年の社会問題を克服する指針にもなりうる。発達障害者支援法が施行されて5年が経過した今、発達障害を通して、人と人とのかかわり方や社会のあり方を見つめ直す。

#### 第1部 本人と家族の挑戦 (1) 2010年9月22日

自己肯定感はぐくむ 「ほめる」のがカギ

##### ■発明王に障害特性

「エジソンも発達障害だったといわれています」

発達障害児の親でつくるNPO法人「チャイルズ」(大阪市港区)の是沢ゆかり代表(44)は6月、発達障害の次男・司君(12)が通う同市西淀川区の市立西淀中で生徒に語り掛けた。

エジソンは「apple」のスペルを学ぶ時、「リンゴはなぜ赤いのか」という質問を繰り返して、教諭を怒らせたという。「いま求められていることに自分を合わせるのが難しく、気がななことがあれば状況に関係なくこだわってしまう。これは発達障害の特徴」

発達障害は、先天性とされる脳機能の障害で、文部科学省の調査では、小中学生の6・3%が該当する可能性が示された。

もって生まれた力がうまく引き出された結果、発明王とまで呼ばれるようになったエジソン。一方、「保護者や本人が障害を受け入れられず、その特性に配慮のないまま周りからしかられ続けると、非行や引きこもりにつながる二次的な障害を引き起こしかねない」とは是沢代表。

##### ■自己評価高める

周りの人たちはどのように力を引き出せばいいのか。是沢代表は「ほめる」を重視。「大切に思われている」などの感情を養い、自己肯定感(自己評価)を高めるためだ。

その上で、「ルールを明確にして約束を守るよう求める」「具体的な指示を、声だけでなく文字でも示す」など、個々の特性に応じた接し方を提案する。

こうした対応力がまず求められるのは、子どもにとって最も身近な家族。是沢代表が2003年に親の会を立ち上げたのは「知識や苦しみを共有し、障害児の子育てを孤立させないため」だった。

かつての苦い経験が原動力となる。司君の発達に違和感を覚えたのは1歳前。言葉はなく、あやしても笑わない。相談した区役所から紹介された医師からは明確な診断が出ず、

自ら探した医療機関から発達障害の自閉症と診断されたのが4歳の時。「このころが一番つらかった」

団体設立後は、大阪市内の各区で親の会が根付き連携していけるようにと、約30団体が参加するネットワーク構築にも尽力。現在は、発達障害児が集団で起こすときの対処法を、保護者が目の前で学べる手法の開発も進める。

#### ■「障害なくても」

症状が重く知的障害もある司君は「円滑な会話や抽象的な概念の理解はおそらく一生できない」と是沢代表。

しかし、生活能力を磨いてきた結果、洗濯や食器洗いなどは「他の兄弟よりもきっちり行う」。細かいところに注目して発見するのも得意だという。「選択肢は少ないかもしれないが、自分で決め、責任をもてる大人になってほしい」と願う。

是沢代表は司君を含め3児の母。「一人一人の個性に寄り添う発達障害児の子育ては、障害のない子どもにもあらゆるところで生かされますよ」と笑顔を見せた。

#### ■個性の延長

淀川キリスト教病院（大阪市東淀川区）の小児科部長、鍋谷まこと医師は、発達障害を「音痴と同様、個性の延長」と総括する。

発達障害は、大別すると(1)広汎性発達障害(2)注意欠陥多動性障害(ADHD)(3)学習障害(LD) - の3種類。先天的とされる脳機能の障害で「子育てや家庭環境の影響でなるものではない」。

広汎性発達障害には、集団行動や対人関係が苦手 言葉のやり取りが苦手 想像力が乏しく興味に偏りがある - の「三つ組み」と呼ばれる要素がある。自閉症や知的障害のないアスペルガー症候群なども含む。

ADHDは、不注意で落ち着きがないのが特徴。LDには、学習上、読み書き算数など特定の困難が見られる。鍋谷医師は「これらの症状は同時に起こることも多く、治らない。しかし、診断で個々の特徴が分かれば、時として大きな転機になる」と指摘する。

「環境を調整すれば生きづらさを取り除ける」面があるため、発達障害の特性があっても、問題なく暮らせれば「障害」とは言えない。

「親のしつけがなっていない」「本人がさぼっている」などと批判され「将来に悲観的なストーリーしか思い描けなかった親子に、新しい希望のある未来の物語を提示するのが発達障害の診断」と強調する。

#### ■良いところ伸ばせ

環境調整は、「文字で簡潔に見通しを示す」「音や目に入る物など周りの刺激を少なくする」など一定の目安はあるものの、「一人一人の特徴に応じて、足りないところを補い、良いところを伸ばすのが基本」と鍋谷医師。例えば「字が書けなくてもパソコンができるので代用する」といった具合だ。

そのためには「身近に相談できる場所を探すのが重要」。広汎性発達障害は3歳ごろには分かる場合が多く、ADHDやLDは小学校入学ごろから分かってくるため「心配にな



発達障害について理解を深めてもらうため講演活動を行う是沢代表



「希望のある未来の物語を提示するのが発達障害の診断」と強調する鍋谷医師

ったら、保健所や校医、発達障害者支援センターなどを訪ね、どう対応していけばいいか学んでほしい。」

ただ、ADHDをはじめ、合併症のてんかんやしかられ続けるなどして表れる二次的な障害には、薬物治療が有効な場合もあり、必要なら病院に行くべきとしている。

#### ■長い目で見て

発達障害の中でも、課題を最後までやれなかったり、でしゃばりだったり、しかられる対象になりやすいADHDの研究を先駆的に行ってきた鍋谷医師。否定的な叱責(しっせき)を繰り返しても「不注意症状が改善することは少なく、かえって二次的な問題を生じさせる」という。

他人に手を出すなどの症状がでてADHD由来の症状ではなく、「自己を否定的にみられ、認められないことによる自尊感情の低下や、周囲と関係が取れない孤立感などから生じる場合が多い。」

問題行動があれば、基本的にすぐにその善しあしを伝えるようにし、しかる回数よりもほめる回数を増やす。「子どもの特性を正しく理解し、かかわることで、子どもは見違えるほど変わる。ただ、その道筋は一定ではなく、親による適切な援助と方向付けが必要」と力を込める。「親は子どもの将来を指し示す羅針盤なんです」

【発達障害者支援法】発達障害者の自立や社会参加に向けた支援について、国と自治体の責務などを定めた法律。2005年4月に施行された。

## 第1部 本人と家族の挑戦 (2) 2010年9月23日

### 理解ある大人が支え “困った子”生かす制度



自宅の部屋で約30種類の動物を飼育する。「将来は自分のペットショップを開きたい」と夢を膨らませる弦川さん

ヤシガニやグリーンバシリスクなど、約30種類の動物が6畳ほどの洋室で整然と飼育されている。中学2年の時に広汎性発達障害と診断された弦川樹さん(18)が、大阪市平野区の自宅の部屋で手塩にかけの生き物たちだ。動植物について学べる専門学校に通いつつ「将来は自分のペットショップを開きたい」と意気込む。

発達障害が分かったのは、睡眠障害を発症したのがきっかけ。親の勧めで小学校から始めたサッカーは「どれだけ努力しても上達せず、中学の部活ではいじめられた」。辞めたかったが、親にうまく伝えられないままストレスはたまり、眠れない体になった。

運動が苦手だったり、自分の思いを的確に表現できなかったりする特性は発達障害でよくみられる。樹さんは診断後、「自分のことが分かり、ショックよりもちょっと安心した」という。

#### ■「相談できる」

両親は樹さんが思いを語りやすいよう質問するなど特性に合わせた工夫をし、生き物の飼育といった得意分野を応援。樹さんは、自宅でヤシガニの脱皮に成功して専門家から評価され、高校では生徒会長や写真部の部長を務めるなど、次々と才能を開花させた。

息子の成長について、母の紀子さん(41)は「話を聞き、受け止めてくれる大人の存在が大きかった」と振り返る。カウンセリングや薬物治療を行う精神科医はもちろん、塾の教師や学校の教員。とりわけ樹さんはバイト先のペットショップの元店長に感謝する。「体調が悪ければ気遣ってくれたし、仕事以外の相談にも乗ってくれた。今があるのはこの人のおかげ」

「理解ある大人」との出会いが樹さんの人生を支えた。

#### ■深みにはまる

「働きたいのに働けない」。発達障害の一つ、注意欠陥多動性障害（ADHD）の山本静香さん（25）= 仮名 = は現在、大阪の当事者団体に参加し、生きづらさを克服するすべを学んでいる。

周りの音が必要以上に聞こえて不快になる聴覚過敏もあり、「話を聞いていないとしかられるため、聞き取れなくてももうなずく癖がついた」。怒られる機会は日に日に増え、定職にも就けない。「見た目では障害が分からない分、余計理解を得られなかった」

自分の意思とは無関係に不安感などが生じる強迫性障害も二次的に発症。行き詰まる中で親が当事者団体に連絡した。同じ苦しみを分かち合い、克服する方法を学べる「仲間」と出会った今が「スタートライン」だ。

#### ■費用のかけ方

発達障害は、周りの環境や理解が本人の人生を大きく左右。社会の制度設計が専門の西條辰義大阪大教授は、社会のあり方について提案する。

“困った子”に対し、(1)放置して、費用をかけない = 非生産的な行動が生まれ、大きな社会的コストが発生する場合がある(2)きちんと支援し、費用をかける = 生産的な仕事をするようになり、費用をかけないときよりも社会が得をする - の構図を提示。

教諭らの研修機能の強化や学校の多様化で「発達障害に対応できるのを当たり前にする」必要性を訴える。

発達障害の特性があったエジソンなど「困った子」の一部が素晴らしい発明や創作をするのなら、社会的なレベルで彼らを大事にしない手はない。それは、一人一人の違いを生かす社会制度にもつながるとみている。

### 第1部 本人と家族の挑戦(3)

2010年9月24日

仲間から「救いの手」 二次障害の克服に助言

「どうすれば『ハウレンソウ（報告、連絡、相談）』ができるのか？」

「やるべきことと優先順位を書いたリストを作る」「どの時点で報告したらいいかを最初に確認しておく」 - 。今年8月、大阪・北新地のビルの一室で、発達障害のある社会人らが、「上司対策」をテーマに実体験に基づいて意見を出し合った。

働いている発達障害者らが支援者となり、同様の障害などで生きづらさがある若者の就労支援をする大阪府の委託事業「社会人ピアワークサポート（ピアサポ）事業」の一環。

大阪・北新地の事務所で、メンバーらと社会人ピアワークサポート事業に取り組む広野代表

主催するNPO法人「発達障害をもつ大人の会」（大阪市福島区）の広野ゆい代表（38）は、発達障害者の特性として「情報の優先順位を付けにくかったり、指示の意図を理解できなかったり

する場合がある」と指摘する。「ただ、工夫や練習で乗り越えられることも少なくなく、あきらめない姿勢が大切」

#### ■医療体制が不十分

広野代表が注意欠陥多動性障害（ADHD）の診断を受けたのは約10年前。そのころは自分に「絶望」し、うつ病を発症していた。

小学校のころから忘れ物が多く、人の話を聞いていないと怒られた。大学で一人暮らしを始めると、部屋の中を片付けられず、金銭や食事の管理もできない。日に日にうつ症状は悪化した。

発達障害への対応をより難しくするのが、この「二次障害」と広野代表。「回復に時間がかかる上、発達障害の特性を理解していなければ根本的な解決にならない」

発達障害のある成人が十分な対応を受けられるのは大阪府内で5、6施設程度という、医療体制の不十分さも指摘する。「その中で大きな支えになるのが仲間との出会い」だ。

#### ■自分の取扱説明書

ADHDでうつ病などを患ってきた同法人会員の伊藤真理さん(34) = 仮名 = は「仲間が自分の取扱説明書を書いてくれる感じ」と笑顔を見せる。

対人関係の仕事が苦手で、指示を受けて行うパソコン業務に適性がある点などを整理できた。「これまで自信がないという思いが強く、得意な面があっても目に入らなかった。それを仲間の指摘で気付かせてもらった」

広野代表は「当事者同士だからこそ特性を理解し合い、適切な助言をできることがある」と力を込める。自身も北海道のADHDのある大人の会を訪ね、「救われた」と話す。同法人設立は「今まで助けてくれた人への恩返しでもある」。

#### ■支援者も成長

ピアサポ事業の狙いもそこだ。サポーターを募り、テーマや職種に応じた成功体験などの情報を共有。支援に役立てていく。

支援者側の成長につながるのも特徴。システムエンジニアの山本純一郎さん(37)はADHDで、人を管理する業務は苦手だが、独自色を出せる仕事は得意という。今回、ホームページの運営などに尽力し、「自分にとってプラス1になる仕事をどんどんやっていく」と意欲的だ。

ただ、就労環境をめぐるのは、当事者だけでなく、企業側の理解も必要。上司対策の意見交換で出た「信頼できる上司」の条件はこうだ。「相手に応じた指示をくれる」「個人的な感情ではなく、正当な評価をしてくれる」「いつもありがとうと言ってくれる」 - 。

広野代表は「発達障害者が求める環境は、誰にとっても居心地のいいものになるのでは」とほほ笑む。

### 第1部 本人と家族の挑戦(4) 2010年9月25日

「ありがとう」の環境で きめ細かい就業体験を  
「働く中で『ありがとう』と言われる環境を用意することが、人が育っていくための一つの鍵になる」 - 。


この発見は、発達障害のある子どもの親でつくる大阪LD親の会「おたふく会」(寝屋川市)が2006年度、大阪市の委託事業で挑んだ就業支援の一番の成果だった。中心的な役割を担った内藤孝子・NPO法人全国LD親の会理事長(57) = 高槻市 = はそう振り返る。

#### ■一般枠の離職66%

全国LD親の会が03年、18歳以上の子どもがいる会員らに行った調査では、一般枠での就職者のうち、最初の就職先を辞めた人は66%。一方、障害者枠では同25%、中でも養護学校(現・特別支援学校)の高等部卒業生は同8%と大きく差が開いていた。

この差について、養護学校では在学中の職場実習が重視される点に注目。働くイメージづくりや、自身の適性を見極めるきっかけになっているとみて、内藤理事長は「きめ細かい職場体験システムの必要性を痛感した」。

そこで大阪市の委託を受け、発達障害の若者らに就業体験させる事業に乗り出す。本人と支援者、企業担当者が体験ごとに



「人は、当てにし、当てにされることを経験しながら生きる力をはぐくんでいける」と力を込める内藤理事長

「振り返り」を行い、できることとできないことを整理。多様な体験場所とカウンセリングなどの相談体制で、本人の自己理解を促す仕組みをつくり上げていった。

このとき利用者たちが一番良かった点として口をそろえたのが「ありがとうと言われた

こと」だった。

#### ■障害者で活性化

内藤理事長と連携して就業体験事業を進めてきた段ボール製造販売会社「矢野紙器」の矢野孝社長（59）は「障害者雇用が職場の活性化につながる」可能性を提示する。

「障害者が周りで働いているのは当たり前」の家業の中で育ち、社長就任後、中小企業と障害者雇用について考えるようになった。

そんな中、経営者は障害者にさまざまな配慮と期待を示すが、障害者もまた同様の思いを人一倍持っていることに気付く。「期待され、応えようとする中で人は成長する」。その土壌が自然な形で培われるのが障害者雇用だった。結果的に感謝の言葉も交わされる。

同社では、日本トップクラスの技術を持つ聴覚障害者らが活躍。「障害者が経営者の求める能力を持っている可能性は十分ある」。一方で、障害の有無にかかわらず楽しめる仕事を模索し、新規事業も開拓してきた。

#### ■“希望の種”

内藤理事長は、高校生になった子どもの将来を案じ、障害者の就職支援の関係機関を回る中で矢野社長に出会う。矢野社長はこの問題に理解のある中小企業を紹介。こうして多様な就労体験場所のネットワークが出来上がっていった。

2007年には、両者に加え、就労支援関係者らが継続的に協力していくため「ネクストステージ大阪LLP（有限責任事業組合）」を設立。生きにくさのある人を、就業体験を柱の一つに据えた多様な活動で支援し、3年で約100人の就労につなげている。

子どもを思う家族の自発的な動きと、障害に理解のある経営者との巡り合いが、発達障害者の未来に“希望の種”をまいた。

内藤理事長は、就労支援の取り組み自体を「社会を構成するメンバーがそれぞれの能力を発揮し合える関係につなぎ直す作業」と位置付ける。「一人一人が世の中を生き抜いていく力を獲得できるように」と願いながら。（第1部おわり）

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行